

季誌  
能古博物館だより

桃源境

青山出<sup>いづ</sup>る処 緑樹深し 人々耳を傾け 鶴声を聞く

古竹老衲岳 印

左は七言二句の原文。作者は日田の南画人平野五岳。多彩密画から見て、若く意欲的な作品と推察される。



写真：杉山謙

北筑亀井元鳳甫著

『烽火山日記 卷上』

使用本は亀井昭陽自筆

訓読 庄野寿人

昭陽の烽火勤番は、本誌前号に詳述した文化六(一八〇九)年八月二十四日から藩領の中央部に位置する鞍手郡「六カ岳」に十日間の烽火台勤務を終えて即日九月三日帰宅。

陶羅嶺 第二

二十日、陶羅嶺(しょうけいごえ)

昭陽は前日の塾生、続いて南冥以下家族の別宴で深夜に及んだが、独り未明に起き自ら竈に火をつけ、また出発の旅装をあらためた。四更過ぎ家族が起き始める。黎明独り博多の番所に赴き、今回の番勤同役を待つ。手配の馬を使って出発し、二又瀬の茶店に小休して各自に氏名を名乗る。篠栗駅に至り晝食。これより阪路、好山美松多し。木戸村に出で数百歩し左の川を昇る。ここ二峰の岐路なり。左右に奇岩あり、或は立ち、また臥す。既にして升降過ぎ大野村に至る。

甲長総八出で迎ふ。婦子は穀を場に曝し、喬扞に禾を架し、連枷して穂を打つ。肅然たる農景なり。遂に陶羅嶺に躋る。烽火を問えば未だ来

烽火台を

甲長 村役人

黎明 夜が白む頃  
二又瀬 博多道の岐路

陶羅嶺(昔は福波町、現在は福岡市郊外の篠栗を経て右手の嘉穂町に越える峠で險路の頂上であつたが、いまは道路改良で低地化する)

四更 朝三時

黎明 夜が白む頃

らず。皆曰く「これ官人の尤も陋たるものなり」と。鎗架もなし、これを梁上に横たふ。杏花村を問えば、甚だ遥かなり。  
平安、火も炬かれず。間人間職この間地に即き、また甚だ間なり。夜に迫り、駭颯、林を鼓し、詩以て自ら遣る。「日落ちて雲火の如く、風驚いて山移らんと欲す。烽火殊に意に適ふ、兒女よ、傷悲するなかれ」と。初更、昏寝す。寝むれば、即ち燈消ゆ。襖中の火付石を探り、鑽りてこれを点す。烟草を吸いて鬱を吐く。簀を出づれば、月懸ること半壁天回青の如し、峻嶺、頂きを圧し、隋山脚を伏す、気色、凄壮たり。  
二十一日。独り起き、形勝を廻瞻す。両山、南北に屏立し、東西に相抱く。(中略) 下午、新平渾酒を湯め、これを進めて曰く、「甲長六次の献ずる所なり」と。色、泥の如くにして稠く、緑膜浮動せり。これを詰れば、曰く「魅衣」と。ああ、ただ酒のみは、白衣もの貴し。鄙なるかな、酒甕に盛らずして肉鍋に注ぎ温むるに堅炭を以てせず、松笠もてす。余、渴したりと雖も、心にこれを悪む。瞑目してこれを呑む。味はその色に勝れり、予曰く「あゝ、これ酒中の駿茂なり」と。

杏花村 酒屋のこと

駭颯 馬車の音

隋山 狭く長い山

新平 藩の命で村役が昭陽に付けた使用人

魅衣 とうじに生ずる淡黄色の細菌膜

又、瞑目してこれを呑む。同幕みな趣を解せず。再酌して興尽く。夜、三更に至り寝む。  
二十二日。総八に束し、手炬一座を借る。署して以てす。源二驚いて拝伏して曰く「君はこれ亀井先生なるか。茅屋の塵舎、万々意にかなわざるべし」と。予、これを嚇して曰く「名貼を取り去れ。多口を要せず」と。源二、唯々たり。夜中、雨ふる。

二十三日。黎明、雄鹿走り、伎々として南北に渉る。小厮吉作は獵夫なり。同幕、その火銃を取り来らざるを切齒す。奴子至り、塾頭の子沢及び吉田森太郎、太田貞順が連名の小封書を帯し来る。驚いてこれを披けば、曰く「先生降りるべくんば、降りて弟子を見よ。弟子躋るべくんば、躋りて先生に見えん。禁命を審かにせざるの故に、謹んで山腹に竝ち、以て請う」と。三生皆躋る。再生の母に遇うが如し。(中略) 家尊室氏・友也及び原土萌の書を致す。ここに於て家尊は、秋府に遊びてあり。三生をして鞋子を脱がしむ。敏哉・子沢、坐に青眼なきを見るや辞して曰く「官舎なり、敢てせず」と。底下に踞まりて餐す。軒に桶なければ、雨来る時は、笠を以て遮る。嗚呼、子沢は賢士なるも滴水をし

同幕 同役の者

青眼 親しい者

賢士 萩藩儒者

て嘉衣を撲たしむに至る心、言うべけんや、貞順、養奴を陋なりと謂いて曰く「いづくぞ能く鶏を割烹して、先生に饌せや」と。猛然として厨に就き敏速なり。(中略)

大杯を挙げて謝して曰く「山中、酒なきに苦しむ。思わざりき、この敵意の杯を含まんとは」と。深飲して徹す。三生すなわち還る。夜、匡坐して文を作す。

二十四日(三十日(記事省略))

十月朔。薄霧浮々として、風神なお怒色あり。発せんとして発せず。ついに松柏の下に舞いて退く、冬日の陽、愛すべし・飲まずして降る。

既に日傾く。甲長正助嚮道す。笹栗駅に抵り、青木定遠を叩ぬ。定遠曰く「司駅某。村医某、まさに迎えて以て犒わんとす。請う。遂宿せよ。」予、官は俗物というを以て、これを謝す。定遠、忽々に予を茶店に延く。

少婦、衣を掲ぐ。予が忽々たるを見て、臥朴を植て、手櫛を脱し側戸を排す。すなわち入る。(中略) 編屋甚次郎というもあり、集落の雅物なり。酒肴を携え、馳せて至る。忽々として斗飲して別る。夕照衣冷やかなり

二又瀬に至り花旭塔に着く。飾師に投ず。府下の食物、人の土産とすべきもの。東に博多糍粑あり、西に

雅物||話がわかる人物

菊店饅頭あり。予もまた十五魂を求めて懐にす。東郭門を入れれば、桜鼓二更を報ず。還れば、子沢と諸弟子、出で向う。家尊未だ還らず。妻と友也とは、衣を納戸に縫う。夜に入り雷雨す。

天山 第三

十月の望(十五日)。司城櫛子より、天山烽火に転ずる命あり。同役は山民平と大西長助たり。(注(いづれも盛代組主で昭陽に三相袋ある)十六日は朝陽侯の祥月命日であったが、現在の役職では拝礼に参会するを得ず、秋月藩士の原古処に献典を托す。(以下五分を略す))

二十一日、雨景瀟洒として、山水淡墨に似たり。士沛、大息一声し、おもむろに言いて曰く「山居、寂寞を遣るべき者は、酒あるのみか」と。余、初め答えず。村正、濁膠を贈る。雪白に冽美なり。共に耐う。時に原左太夫、平嶋玲蔵の二士、山家駅より来る。兩名は駅官の子弟なり。既に我が塾生たり。小吏箕形芳助なる者を従う。直ちに持参の包物にて料理を為す。ただ美味口に適うのみならず、又海淡の時にかなう。鶏骨、鯨腸、煎豆、菹菜、豊かなるを三主三客驪しむ。嘔劇して人定に迄る。

夜半すなわち臥す。

二更||いまの十一時頃  
家尊||父のこと  
友也||少栗のこと

司城櫛子||昭陽が所属する城代組の組頭  
山民平||昭陽の妹婿・号は士沛  
朝陽侯||秋月藩主で昭陽に信望厚かつた

(次の難漢文一、五四〇字を略)  
二十三日。暁天雲なし。  
(以下六六〇字略)

二十四日。峽禽の声樂し。握を掲ぐれば、山薄に風なく、原田に霜なし。(以下、文略。但し人物名のみ掲記する) 織田岐山・西山拙齊・庄屋善次郎・片山潤蔵・上田玄知・福井源蔵・幸蔵。(二千九字略)

二十五日。夙に起きて水に洗顔し、西方寺に詣り、香を焼く。詩を賦して曰く、「朝に山麓の寺に趣き、菓を展じて空王を拝す。空王は母の貴ぶ所、死孝津梁を仰ぐ」と。

この日、長州藩の寄託生で長州藩儒の片山子沢が二年の修学を終え退塾、帰国する。昭陽、送るに三書生を付ける。昭陽、詩に曰く「山に陟り水に臨み將に帰らんとするを送る。賢は遠く来りて別れを山に告ぐ。僕敢えて離愁を水に写さざらんや」と相語りて行く。畦汐あるごとに子沢必ず辞す。ついに送って柴田川に至り、子沢と訣れて曰く「君を送るのと千里、ついに須らく一別すべし。強飯してこれを望む」と。子沢の曰く「二年を出でずして、縣文祥、まさに崎陽の行あらんとす。小生、必ず借にせん。前期遠からず」と。余、これを瞻望して曰く「可なり、

洗顔||洗顔をすること  
空王||仏のこと

嘔劇||笑いさざめく  
人定||午後八時

能古博物館だより

具慶の人よ」と。短句してこれを哀しみて曰く、「君に高堂の老あり。行けよ、上これを慎しめ、故人陟屺の涙、瀝々として黄泉に灑ぐ」と。余、遊道広からずと雖も、原土萌、牧大野、邨孟中、広瀬淡窓、梟文梓、山子沢、国子高、頼子成、山聯玉は人物文藻、相頤頑して名を身後に成す者なり。(注)昭陽人を知るを切なくし、その情打たれるものがある。

和七の婚善七は、泉屋善右衛門の子なり、雙々として来て外姑の病を見る。余、二十年前に武蔵温泉に遊び、泉屋に淹まること旬余、時に善七は六、七歳の佳兒なり。よく、野鷲を追うを見たり。

食事、風麗々然として作り、林簾拉撰する。午読すでに倦み、独り出で氣を中宸に吹くに、石上に詩を題するを見る。喜平を喚びでこれを問えば、則ち武弁某氏なり、士沛曰く「この漸々足る者は、これ巨靈得意の巧者なり。村人鑿ちて以て応真像を造るは、大いにこれ殺風景なり。たまたま小詩を得たり。「頑耄の石を莊嚴し、謾りに福田を求めんと要す。かくの如き天造の美は、また彫鐫を費すなかれ」と、余、これに和して曰く、「山岨、乱石を吐き、玉の藍田に賛するに似たり。これ天仙

相頤頑||人と優劣を競うこと

外姑||妻の親

拉撰||枝をゆすりくじくさま

彫鐫||彫りきざむこと

の篆にあらずんば、用意に鑑るを要せず」と。士沛、これを咲いて曰く「二禁又一禁」と。余、曰く「これを自然に帰すのみ」と。士沛と古今詩刪を展玩し、ついに漢唐人文の交を談ず。士沛曰く「牧大野は、西京の詩の人に似たり。余殊にその風鑑に服す」と。喜平は老物なり。雛蹠を盆に漏りて曰く「相公の素食のため、謹んで以て上献す」と。暮食至る又、腐と土酥を油炒して、これを進む。俗にいわゆる雷豆腐なるものなり。

(注)烽火臺の食事は、藩命で地元の庄屋によつて百々三食を給すされ、これを近辺の農家に担当させた。飽吃して臥す。

二十六日。霜威峭寒にして、四未鞞らんとす。更に一綿を加う。原生獵衣し、二犬を従え、戸を叩いて曰く「石頭の飲、今日醒を折めんと約す。伯父某の福府より来るに会す。食言を謝せんが為の故に、捷逕を取りて犬と走る」と。予曰く「いづくよりせる」と。原生顧みて曰く「かの崖山鬼よりす」と。予曰く「然らば則ち姑くかの金壘を酌まば、いかに」と。原生、その鞋を脱して坐し、五觥を飛ばして則ち曰く「門を出るとき家釀をこし傾く。酒と酒、こもこも胸に戦い、すでに足れり」と。これを

油炒||豆腐とおからを油炒めたもの

飽吃||満腹すること

更に一綿を加う||掛布団を一枚重ねること

獵衣||獵に出る厚衣を着用する

家釀||自製の酒

強うれば則ち曰く「家に尊客あれば、まさに唯諾を慎むべし。敢えてせざるなり」と。予、その敏なるを嘉す。安武大成、濁醪三経、割鶏、臠蔬、橙子、柚子帯び来る。大成は雲米の徒にして玲藏と齒相若く人の大情、齒相若くば、則ち心も相若く。齒相及ばざれば、談もまた真ならず口を開いて大振すると雖も、その声、天門より来らず。古人言うあり、「笑は人身の和氣祥風なり」と。

一生足らずして、二生余りあり。困漑の間、履声の太だ癩しきを聞く。これを視れば、則ち單々たる平生なり。汗、額に漲りて曰く「廬城の人飲を献すと聞く。小生は敢えて陪を失せじ」と。予、喜びて後知るべし。

廬城は古駅にして、太宰府に赴くの官道なり。酔に乗じ、村正の家に行きて浴す。落日、山に登り、懣れて臥す。

(おごとわり)

皆様に読みづらい文章を長々と書きました。これでも昭陽先生の漢文傑作とされる『烽火日記』三巻の巻上の三分の一です。昭陽先生の古文辞漢文は、当時から学会で評判にされました。中国でも古い時代の漢文体で書き上げたもので、現代の新しい漢和辞典では見当たらない用字も多く、博物館の岩下女子職員も努力も多分です。本誌「館だより」も、おかげさまで三十一号に及びました。以後は、気楽に面白くお読みいただける内容にしたいと考えております。どうか、皆様からのご寄稿も遠慮なくお寄せ下さい。お願い申し上げます。5、6頁の安陪光正先生のエッセイ寄稿も続けられ、何よりです。

臠蔬||よく煮込んだ野菜

履声||足音のこと

# 不 争 の 徳

安 陪 光 正

## 銀杏黄葉

暖かな朝日をあびて渡船場に立つと、長くつき出た突堤に海鷗が四羽並んでいた。三羽はじっと動かないが、一羽はしきりに羽づきろいをして時にサッと羽を広げたりもする。すぐ下の波間にも数羽の海鷗が浮き沈みし、中の一羽が突然羽ばたいて、海面すれすれに飛ぶ。飛びあがるかと眺めていたが、そのまま低く飛びつつけ、ようやく海面をはなれ、ゆっくり上昇して能古の青空へあがった。海を隔てた能古の中腹に、秋の日を集めて博物館が白く輝いていた。その左下の黒い森に永福寺があるのだが、ここからは見えない。森の左の大銀杏が薄黄に染んで、まだ黄葉は散っていないようだ。島に着いて仰ぐと上三分の二は裸枝となり、下枝に黄葉をつけるだけだった。大樹は高い石段の上であり、降った黄葉を踏んで登った。

蒼空に聳える大銀杏は、小春日を浴び、風もないのにハラハラと落葉を降らしていた。樹下のつつじに積み、境内に散り敷いたいちめんの銀杏黄葉がまぶしかった。黄葉明りに、私たちは頬を染めて佇んだ。荒々しい大樹の幹には青鳶が這い、根元に生えるのきしのおにも数片の黄葉をとどめていた。太幹に掌を置けば暖かで、丁度ふた抱えの太さである。五メートルの高さまで枝がなく、その上から四方に太枝を広げ、上方の冬枝はこぞって蒼空を指していた。三百年の風雪に耐えたこの大樹は、能古の歴史を見守ってきたにちがいない。よく見たが垂乳根はなく、下枝の葉陰に、はや茶褐色の冬芽をつけていた。私



“フェリーのこ”の甲板から、島の雑木紅葉の中央左よりに見える銀杏大樹、下枝に黄葉が残る

たちは境内を通り、博物館への道を登った。

## 不 争 の 徳

今日の講義は、老子第六十八章が主であった。小川環樹の訓み下し文によると、

「善く士爲る者は武ならず。善く戦う者は怒らず。善く敵に勝つ者は与せず。善く人を用うる者は之が下と爲る。是れを不争の徳と謂い、是れを人の力を用うと謂い、是れを天の極に配すと謂う」

「すぐれた戦士は武ならず」の武について、小川は王弼注を引用して、まっ先にかけて出して先を争うことと書き、荒々しいことと解釈している。真の勇者は猛々しくなく、い、というのであろう。藤堂明保編『漢和大字典』によれば、武は、戈止の会意文字で、戈を持って堂々

と前進するさま、ないものを求めてがむしやらに進む意を含むという。

「善く戦う者は怒らず」の怒について、怒は、いかる・おこる・はげむ・はげしいなどの意味があり、解字では、奴（力をこめて働く女）と心とからなり、強く心を緊張させることをいう。白川 静著『字統』によれば、奴に努・努など、はげしく勢を加えてことをなす意があり、怒もそのような心意の状態をいうとある。先生は、高亨の「怒は健なり」を引用されて、ハイな状態と説明された。怒ったハイな状態であれば、感情的となった心の平安が失われる。だから善く戦う者はハイな状態になっではいけないといわれる。要するによく戦う者は激せずといった処であるか。今日わが国では武器を持つて戦うことはないが、会議での争論は日常的である。その際ハイな状態になって、平常心を失ってはいけない。激してはいけないと置き変えてもよさそうである。怒るのは、相手と対等な立場に立って、感情をむき出しにした状態であるから、判断を誤りやすいのである。これは、その場において、言うは易く行うは難いことではあるが。

「善く敵に勝つ者は与せず」の与

を、小川は、党与すなわち同盟者になる意と相手にする（敵とする）の意があり、ここでは後者の意に解するといふ。先生は、高亨の「与はあたかも門なり、昔は対門をいいて与となす」から、与を門と解され、たかわずと説明された。ちなみに門は、二人の人が手に武器を持ち、たち向かって戦う姿を描いた象形文字「門」で、今の闘の原字という。古来「戦わずして敵に勝つ」という言葉があるが、「善く敵に勝つ者は戦わずして勝つ」ともとれそうである。「善く人を用ふる者は之が下となる」の下を、小川はへりくだると釈している。これは以前に説明を受けた「上善如水」同様に、水の如き恭謙を示すものであろう。

### 文字の起原

文字の成立は、今から約三五〇〇年前の甲骨文字に始まる。亀甲や獸骨に刻まれた中国殷代の文字で、事物の形にかたどった象形文字である。先生は白川博士の『字統』『字通』を紹介され、老荘によく用いられる文字について解説された。

「道」は首と走からなる。これは首を携えてお敵いしながら道を行

く意で、おそらく異民族の首を携えて、外に通ずる道を進むこと、除道（除はお敵いをする）をしなから進み導くことが道の初義であろうといふ。行は十字路の形、止はハカからの象形文字で内外に通ずる大道をさし、外界に通ずる道は外族や邪悪なる霊に接触するところであるから、除道のための儀礼は嚴重だったらしい。私は講義を聞きながら、沖繩の四辻や丁字路に立つ魔除けの石神石敢当を思った。それは福岡でもよく見かける猿田彦大神や庚申神などと同様に、外部から村や町へ侵入する疫靈悪鬼の類を防ぐものとされている。道・除道・悪霊・石敢当や庚申神などを並べてみると、道の初義と関連がありそうに思われた。かかる道が、老子の「道」のような抽象的意味を持つに至ったのである。

「賢」は叡が初文で、叡は臣すなわち目の眼睛を又（右手）を加えて傷つけるもので、神に捧げられた徒隷をいう。大きな目の形の臣（臣も、臣）とその眼睛を破る形（臣）の叡とは、表意文字としては一係をなすといふ。また目を財貨と解すれば多財となるともいふ。「聖」は、耳と王と口とからなる。耳と王とは耳を強調した人の形、口は口で祝福

を収める器である。すなわち神の声を聞く形を示し、巫史の徒で、身分の低い者をさした。聖賢はもと、神に仕えて祭事や神事をつかさどる神人であった。孔子は巫史の出身だといわれている。

「真」の旧字は眞で、匕と眞からなる。匕は死者、眞は首の倒形、あわせて顛死の人をいう。眞とは死者、それはもはや化することのないものであるから、永遠にして眞実なるものの意となる。『莊子、大宗師』に「真人ありて、而る後に眞知あり」の如く、永遠・眞実・絶対など、最高の価値あるものとなった。具体的な眞が、抽象の意味に高められた例である。

このように主に白川博士の著書を引用されながら、老荘によく見る「道」「賢」「聖」「眞」についての説明があった。これを聞きながら、文字の成立や変遷に想いを走せた。

### 文字は生きている

文字がなかった時代、人は語部によって物事を伝えるより外はなかった。中国では約三五〇〇年前に甲骨文字が作られたが、それは山（山）とか川（川）のように、物の形から生み出された表形文字が基本であった。この造字法には、象形・指示・

会意などの法がある。私たちは小学生の頃から文字を学び、高学年になると漢字も多種多彩となり、文字を使って風物を叙し、心情を述べることを教えられた。同時にまた人の書いた詩文を読み、行間に秘められた人の志や情を付度することができるようになった。当時私は、文字の成り立ちについて学ぶ事もなく、漢字とその意味を丸覚えしたにすぎなかった。

今講義を受けながら、漢字の起原について学び、改めて漢字を作った偉大なる先人に想いを走せる。彼らは次々に漢字を作り、竹簡や木簡に書いて考えを後世に伝えた。今我々が学ぶ『老子』や『莊子』もその中の一つである。二〇〇〇年余にわたって写し伝えられたこれら古典には、誤記もあるうし、漢字の意味も今とは異なるであろう。講義を受けながら、学者によって異なる解釈を聞くことも面白く、感銘を受ける句文に接することも少なくない。忘れ難い句文がこれら古典の中にちりばめられ、時空を越えて我々の心を打つ。その新鮮さは、我々の血潮を呼び醒まさせる何ものかを持っている。文字はやはり生きている。そんな想いで、私は講義を拝聴する。

## 亀井学・こぼればなし

お正月ですので亀井学から一息抜いて余談をいたします。

### 南冥父「聴因」の修業と信望

聴因の生れは筑前国怡土郡三雲村（いま前原市）代々、中農程度の三男。百姓ですから、姓はありません。

先祖は旧原田氏の家臣で三嶋伊豫守であったとしますが、原田氏は豊臣秀吉の九州征伐に攻略され全領地没収。

秀吉は戦国戦乱に乗じて土地を侵奪したのを一切認めず追放します。

## よ り だ 博 物 館 古 能

その家来の多くは地元で帰農し本来の姿に戻りますが、なお多くが先祖を△△守であったなど誇称していました。原田氏そのものが朝廷から位階や受領地方官の呼称、位記を受けることを得ておらず、ましてや家臣に与えられることはありません。

三男の聴因は十六才で福岡藩でも名門で知られる藩医筆頭の鷹取養巴に下男奉公し、その実直さと才能を愛されて葉籠（やくろう）（往診に使われる医薬を納めた提げ桶）持ちとなって主人の往診に従い、時には許されて診察の背後に付くなど、これで診療、投薬の委細を

見聞していたのです。

聴因は、こうして鷹取氏の古方医学と、先生の教養である古学派（徂徠学）を学んだことが、本人の将来すべてに開明をもたらしたので。

九年後聴因は開業を許されます。

廿五歳、家兄から多少の資産を与えられ姪浜に移ります。

姪浜は唐津と福岡の往還路。黒田藩領では城下の福岡、博多に次ぎ、南の甘木と並ぶ西部の小都市とされていますが、湾海にのぞんで姪浜に活気があったようです。

聴因は、思案三年「姪浜、網屋筋」に持家を得て医療開業。

すぐに、藩医鷹取家修業が評判になって診療繁盛、また本人の徂徠学の実学性も近郊の話題中心になって信望を高めた。

これに聴因の開明性と好学は、街道通過の学僧、文人に知られて、訪問と宿泊が多く、中には長く滞在して聴因を中心とする集まりに講説の求めにも応じてくれ、これらが聴因の人柄をさらに大きくした。

この中で、徂徠から畏友と立てられた肥前連池の学僧「大潮」の存在を知り、聴因は再三訪ねて己も教導を受け、大潮に長男南冥十四歳の入門を託すに至った。

南冥は、大潮学塾に居ること四年、

この間に大潮の名声を慕って訪ねる多くの文人墨客によって、南冥が啓発されることも多かった。とくに、当時すでに卓越した医療で信望を篤くしていた永富独嘯庵を知る幸運に恵まれた。

独嘯庵は、長州藩儒で徂徠の最高弟とされた山県周南門下で、医療は古医方派の名手とされた京都の山脇東洋に学んでおり、すでに独嘯庵こそ医聖なり、と呼ぶ声もあった。

しかし、独嘯庵はなお自分は医生に過ぎずとして研学、医療の実際を親試（患者を手にとって診察すること）実効に求めてやむところなく、諸国を歩いていたのである。

この後、南冥は医療修業を志して大潮門を去るが、その前に弟の頼母十二歳を伴い大潮に就かせた。

師大潮はすでに八十歳を越える高齢であったが、なお明和五年、九十一歳の長寿を保って没するまで、よく書を講じたとき、晩年は連池藩から藩士の勉学に尽くした功績で扶持を給された。なお、大潮については昭和四十九年三月、佐賀の川頭芳雄氏が詳伝の労作をされ、佐賀県郷土史物語第一輯として出版されていることを紹介させていただく。

### 南冥の医療修行

宝暦十二年、南冥二十歳となり専ら医療を習得のため京都に上る。

父聴因の要望である古医方の大家である吉益東洞に就いたが、まもなく自分の判断でこれを去った。

東洞入門は父の望むところであったが、これを去った原因はよくわからない。ただ東洞七十歳、早くから名医の評を得ており常に公卿、大名と富裕な商人から診療を乞われ、迎える乗物を待たすなど老大家としておさまっていたという。これに地方からの医生入門など顔を合わせる暇もないとされたことは、ほかにも事例があり、こうした東洞の尊大を南冥が嫌ったという説がある。

南冥は、こうした状況の中で、永富独嘯庵の大坂開業を知り、師事することにになった。南冥は大潮門に修行中に直接、独嘯庵にめぐり会う機会があり、師大潮からもその人となり聴かされていた。

独嘯庵は、まだ教えるに至らないと最初は南冥の要望をことわった。結局、本人の熱意を容れたのであるが、永富独嘯庵が南冥に及ぼした影響はきわめて大きく、南冥は良き師にめぐまれたとされる。

独嘯庵については、次の機会に詳

述するとして、いま一つ南冥に幸いがある。それは、永富門下で小石元俊を終生の得がたい友とし、真に良き師良き友に恵まれたことになる。

永富門における南冥の勉強は、さまざまのいもので、その実態もよく伝えられているが、学友の元俊が「南冥は、猛虎のようなもので全くふりかまわず、京都の儒者などと比べようもない」と語ったことを、後に広瀬淡窓が聞き書きしている。

## よりの博物館古能

この話の引合いにされた京都の儒者というのは柔弱でうわべだけという意味ではない。むしろ江戸の学者や医師には諸侯の扶持を受けるなどして武士身分になると尊大になり、実力がともなわれないものが多いのに比べて、京では専ら学力や技芸の習練によって知名を高めること、これによって門戸を張るという学問の伝統、社会風潮が強かったのである。

### 亀井家・福岡城下に移る

南冥は二十一歳で帰国すると、父聴因と共に福岡城下の唐人町に移り、約六百坪の屋敷地に、まず父子の医療を開始した。以来、父子の熱心と合理主義の医療は、市中の人気を得た。当時の医学原書は、すべて漢書である。したがって医療の勉強に漢字と儒教の教養が備わるのは当然であ

る。南冥は、先師の大潮、医師の師独嘯庵から一貫して古文辞学を学んでいる。

この古文辞学は、荻生徂徠がとくにその学説を展開したので徂徠学、門下生を徂徠学派とされた。

その主張は、儒教の原典を正しく読んでその真理を解するには、漢唐の古義、古文辞に回帰すべきとする。

当世の朱子学（中国後代の宋時代に興った宋朱子学ともいう）は、古義原点を離れ過ぎて原書の訓解に誤りが多い。このため真意を失い学問本来の経世実用を失う結果になっているとするものである。

こうした学説を推し進めると、徳川幕府が創設以来の政治の仕組みと拠りどころにした朱子学を真向うから排除、攻撃することになる。さらに主張を強めると、例え正論であっても、天下の御政道に対する批判になりかねないものであった。

### 朝鮮信使との筆談

宝暦十三年、朝鮮信使が来朝した。福岡藩には、信使の乗船を領内の藍島に停泊させ、一行を歓待する慣例と責任が課せられていた。

南冥は自分の勉強のために、上陸仮泊する信使の接待に当る福岡藩士に乞うてその従者となり、韓使一行

の中に筆談と試問する機会を得た。

南冥の目的は、いま一つ一行中の医官について少しでも医療、漢方についての知識を得たいとした。

滞在三日間、南冥の筆談がすぐれていることがすぐ信使中の評判となり、互いに詩文の交歓をするまでにあって時間が足らなかつた。

このときの筆談記録は「決々余響」として、南冥著述の第一作であるが、この中には医官「李佐国」との医論問答がある。また彼我の文学論に及んで師永富独嘯庵の英明ぶりを語った。

これに韓使中の製述官「南秋月」から大坂で永富師に会見できるようにしてほしい、と頼まれた。こうして南冥が一行に公式に接見することは、南冥が福岡藩士の資格を欠くため許されないことであつた。

このため南冥の行動は、藩当局に強い非難が出たが、南冥の学力、とくに詩文について信使中に賞賛の評判を得たこともあって軽い叱責で済んだ。

また、南冥の唐人町居宅に、こうした評判は、期せずして医療と儒学の教授を乞うものが多くなつた。もともと当時の医と儒は一体である。

このようにして医療を営むかたわ

ら亀井塾は出発した。

南冥は己れの医と学を試すために肥後、薩摩などに遊学を試み、とくに長崎には再三行き原書を読むため唐音（中国語）の習得に努めた。

九州に南冥あり、とする声は次第に全国から注目され始めた。このような学風は、徂徠の死去と、その有力な門弟であつた太宰春台、服部南都、山県周南など相次いで没したこともあって、徂徠学派は次第に勢力を失っていた時であり、俄然、南冥をして学派再興の気運とされた。

とくに、南冥が人材を愛し教育に長じ、これによって門下に多数有名な人士を輩出したとする教育者としての特長は、広瀬淡窓が儒林評に書いた通りである。

再び父聴因に及ぶが、聴因が南冥に財を惜しむことなく注いだことも美事に突つた。その一例に、南冥の長崎遊学中、一夜に三十両を散財するということがあり、この支払いにすぐ聴因が応じて、南冥に一言の説明を求めなかつたという。

以後、南冥は同様のくりかえしをすることがなかつた。ただ、唐船の入港による書籍の購入に多額の資金を求め、また高価な薬剤についても惜しむことなく買ひ求めたが、これら



能古博物館だより

は父子共々の医業にしたことである。こうして南冥の評判は高まり、諸藩から仕官の誘いがあったが、南冥は修業の進んだ弟子を推薦して自身は動かなかった。

福岡藩は四代綱政以来、藩政すべてに先規先例によるとして藩士の新規召抱えなど閉鎖的になり、すでに六代継高に及んで、なお藩の現状墨守は固くされていた。これには、当時の藩政は藩主支配から家老協議制に移され、なお旧習前例の踏襲をすることはなかった。これに藩財政の窮乏も最大の事由であった。

黒田家の代替り

六代継高に嗣子なく、ようやく七十歳を超えて藩祖長政からの血統を断念するまでに至った。幕法は「嗣子無きは断絶」としており、このため大名家の改易（藩の解消をいう）の実例は多い。ついに藩主継高は、幕府老中に申出て他家養子の斡旋を願いだした。これに時をおかず徳川治之の養子内命があった。

これに継高はもとより藩士一統に期待させたのは、次代の藩主となる治之の健康と人柄である。江戸詰の藩士からの情報もあり、治之の得意は馬術である。

起床すぐに馬攻め（乗馬の修練をすること）、朝食後から徂徠学の習得、午後は再び乗馬、とくに遠乗り。このため福岡藩養子が内定して将軍に挨拶に出ると、饒別に三條吉光の脇差しを、将軍がすぐ己れの着用を手渡し、なお治之の馬好きを知っており、領国道中には將軍乗馬と鞍を三葉葵金紋付きのまま拝領したことなど、早くも福岡家臣団の知るところになっていった。福岡藩の江戸上屋敷は式万式千坪で馬場もある。治之の養子が決まるとすぐ、黒田家上屋敷に迎えられて毎朝、治之の馬稽古がはじまったという。それにしても、治之は十三歳の少年である。

一年おいた明和三年七月、十五歳の元服加冠之儀式を行って、江戸本丸に登城。將軍家治に拝謁、従四位下式部大輔に任官。この時、將軍から備前国利光の銘刀を引出物として拝領。これで筑前黒田藩は全国五指に入る大藩、これに徳川家から藩主養子が出ることは前例がなく、このため幕閣としても、とくに配慮を加えたことが察せられる。

將軍家には尾張はじめ御三家と、一ツ橋家など、いわゆる御三家・御三卿という將軍直の大名家があるが、これに次ぐ親藩は、治之の福岡藩。

いふなれば徳川家幕閣が信頼できる大名家の創設となる。これは西国遠地の外様列藩に徳川体制の伸張が西国遠地の外様列藩に徳川体制が大きく出現するのである。

さて、本題にもどる。老藩主黒田継高は、黒田家の家名存続を絶対とし、このため徳川家一門からの養子は最善とした。これで黒田家の家名安泰が固く期され、とかく外様大名に強く潜在する不安が解消、幕府は治之藩主の黒田家を徳川氏の準一門として遇し、保障されると考えたのである。

継高は、我が代で筑前福岡藩、即黒田家の永代保障を得たと確信した。

江戸屋敷の正夫人から「早く固めをお急ぎあれ」と言われたことも、己れら夫婦に嫡男を得ず、この内心自負があつての即断とした。この後は、治之に福岡藩認識と藩主就任に確信を持つ機会と時期の到来を助長してやりたいと、これで老藩主に自信が生じた。

元服が済んで、治之の江戸上り、すぐ將軍謁見を上首尾に済ますと、大名家の後嗣は、当代の大名正夫人与同様に、江戸上屋敷定住が幕府の定めであった。これは、参勤交代で大名自身は一年おきに領国と江戸を

往来させる参勤交替の定めと共に、正夫人と後嗣者の江戸居住は、幕府の人質政策によるものであった。

すでに戦国の余風なく、大名反乱など全く考えられない太平の世であるが、こうした幕府初期からの掟は、いささかの緩みなく守られている。

治之とて例外はない。ただ、江戸屋敷定住であるが、後嗣として領国認識のため、養父継高の参勤をはずして幕府老中の許可を得て毎年数ヶ月の福岡帰国を始めている。この中で治之は、福岡城内に己れと付属家臣団の別棟区画がある。これに元服後の二年目、すでに側室に一子を得て、これを己れの屋敷内に小世界を造っていることを、継高は知った。

治之付の家老に委細を聞くと、すでに養子入り直後の領国帰りに、付女中を手がけたものとわかった。当時すぐに家老の耳に入り、内偵をしたところ、幸いに素姓の良い家臣の娘でもあり、内密に側室身分を認めて出産。女子であったが、その後も両人交際がにつき、治之公屋敷内に適当な御居間を設けております、と。

これに継高も「よく扱ってくれた。今後共に頼む」と承認。その方の計らい含みおくぞ、とお言葉をいただいております、と聞かされた。

# 維新勤王事蹟

## 明治三十九年 莊山敏功(談)

表題は、当館賛助会員・莊山雅敏氏の御祖父が郷土の公会堂等に求められ幕末の史実を講演、さらに「忘れかたみ」の副題で美濃紙廿一枚に筆書され、その六ヵ月後・御死去という文字通りの遺稿である。

内容は、久留米

藩における真木和泉守を中心に筆者もかかわる勤王活動。この間自身も捕縛と投獄数回を受難。七郷亡命で又受難。最後は三条実美卿の太宰府から京都帰還。これで御本人の牢舎五年も解放される。

まさに王政復古、実現である。以下本文に入る。

私に真木泉州先生(真木和泉守のこと)の水田における事蹟を話せることとありますが、わたしも年を取って居り、且つ泉州先生が水田(筑後国八女郡・現筑後市)に居住せられたのは、一昔前のことですので記憶が乏しくなったこともあり、



筆者の晩年像

これに話も下手でありますと、再三御断り申しましたが、是非にどのことでもあり本日この席に出ました。昔のことは今日から言えば実に夢のようで、いささか纏まりがつかぬ事もあると思います。これもお断わり申しておきます。

さて、真木泉州先生が、よく書生を引立てられたことは、現に私自身が先生から教えられた一人であり、先生が如何にして書生(若い者をいう)を引き立てられたかについて、まずお話を申します。

当時、久留米藩主の有馬義源公は英明で、はやくより水戸藩藩政の良さを認識されて、水戸の政治に習って我藩の政治改革をお考えになった。よって、真木和泉、木村三郎などを水戸藩に派遣されて、調査させられたのである。その結果は、右の人達が帰藩するに及んで、愈々藩政改革に着手するとなつて反対派の反動が盛んに動き始め、真木泉州・水野丹後ら改革連累者十人を幽囚、その家族親類に監視と責任を申付けられたのである。

### 亀陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 玉置貞正⑦・西島道子③⑦
- 西嶋洋子⑦・木戸龍一⑦・吉原湖水⑦
- 岡部六次太⑦・村上靖朝⑦・星野万里子⑦
- 吉村雪江⑦・桑形シズエ⑦・田上紀子⑦
- 安松勇一⑦・上田良一⑦・高田浩二⑦
- 桑野次男⑦・石橋七郎⑦・藤本光子⑦
- 和田宏子⑦・板木継生⑦・行成静子⑦
- 鬼塚義弘⑦・中畑幸信⑦・片岡洋一⑦
- 石川文之⑦・橋本敏夫⑦・山内重太郎⑦
- 都筑久馬⑦・斎藤 拓⑦・横山香一⑦
- 古賀清子⑦・宮崎 集⑦・天谷千智⑦
- 原 重則⑥・岩下須美子⑥・岡本金蔵⑥
- 三宅碧子⑥・星野金子⑥・西 政志⑥
- 安永友儀⑥・織田喜代治⑥・上田 博⑥
- 鶴田又三子⑥・速水忠兵衛⑤・西村忠行⑤
- 西川真澄⑤・青柳繁樹⑤・磯崎啓子⑤
- 伊藤康彦⑤・寺岡秀實⑤・原田種美⑤
- 坂田泰滋④・岩重二郎④・桃崎悦子④
- 大神敏子④・石橋清助④・塚本美和子④
- 奥田 稔④・大山宇一④・長八重子④
- 隈川清次④・井上敏枝④・柳山政志④
- 川島貞雄④・岸 洋子④・栗山美多恵④
- 久芳正隆④・吉富とき代④・半田耕典④
- 武藤瑞一④・浜野信一郎④・莊山雅敏④
- 森本憲治④・古野開也④・長尾茂穂④
- 平河 涉③・墨 羊子③・神戸純子③
- 吉田洋一③・渡辺美津子③・原 敬道③
- 山田博子③・佐藤泰弘③・黒川松陽②
- 野田はつ②・木原謙治②・荒谷幸子②
- 前田静子②・矢岡謙治②・神戸 聡②
- 飯田 晃②・吉岡克江②・星野 聡②
- 首藤卓哉②・藤野清春・永岡喜代太①②
- 林野祥子②・井手俊一郎②・増田 義哉②
- 江里朝男②・吉田 一郎②・今林法子②
- 江頭藤子②・池田 修三②・黒田喜美子②
- 権藤菊朗②・宮嶋熊太郎②(前原市)
- 由比章祐②・衛藤博史①②・田代直輝②
- (大野城市) 久野敦子②・田代直輝②
- 執行敏彦④・伊藤泰子②・渡辺千代子②
- 坂井幸子②・(春日市) 後藤和子②
- (筑紫野市) 脇山浦一郎⑦・川浪由紀子⑥
- 横溝 清⑤・足達輔治②・川田啓治②
- (太宰府市) 佐々木 謙⑦・中村ひろえ⑦

- 古賀謹二⑥・西尾弘子⑤・平岡 浩④
- 野尻敬子②・蔵田はつよ②(筑紫郡)
- 結城慎也⑤・(粕屋郡) 榎田正己⑦
- 榎田 敏子⑦・青木良之助⑦・松本雄一郎⑦
- 神崎憲五郎⑥・友野 隆④・鈴木恵津子④
- 酒井俊寿③・長崎榮市②④・鈴木伽維子④
- 上杉和穂③(宗像市)・益尾天嶽③
- 木村秀明⑤・野上哲子③(甘木市)
- 佐野 太⑦・酒井カズヨ⑦・黒崎邦彦⑦
- 井手 至⑦・井上 清⑦・宮崎春夫⑦
- 富田英寿⑥(朝倉郡)・鬼丸碧山⑦
- 山崎エツ子①(飯塚市)・小山元治⑦
- (浮羽) 魁⑦・古瀬宗雄⑦(大牟田市)
- 嶽村 魁⑦・古賀義朗⑦・西山正昭③
- 古賀邦靖②(筑後市)・中島三郎③
- (苅田町) 木下 勤⑦(北九州市)
- 片桐三郎④・平野 巖④・市丸喜一郎③
- 豊島嘉穂④(久留米市)・庄野陽一⑦
- (柳川市) 榊島政信②(直方市)
- 山本利行⑤・鋤田祥子③(佐賀県)
- 甲本達也⑦(大分県)・寺川泰郎⑥
- 田本政宏④・鳥井裕美子①(長崎県)
- 浦上 健③(熊本県)・濱北哲郎⑦
- (山口県) 大塚博久⑥(大阪府)
- 小山富夫④(京都府)・松賀 清①
- 辻本雅史④(京都市)・(滋賀県)
- 武内隆恭⑥(愛知県)・杉浦五郎⑥
- 庄野健次⑥(神奈川県)・中野晶子⑦
- 野崎逸郎⑦・片桐淳二⑤(東京都)
- 山根ちず子⑦・大桐淳二⑤(東京都)
- 村山吉廣③・大島節子②(千葉県)
- 森 久⑥(埼玉県)・間所ひさこ③④
- 伊藤英邦①(石川県)・丸橋秀雄⑥
- (宮城県) 田中信彦①⑥

### 【協賛会員(個人)】

- 片桐 寛子(福岡)⑦・菅 直登(福岡)⑦
- 早船 正夫(福岡)⑦・浄 満 寺(福岡)⑦
- 笠井 徳三(福岡)⑥・永田 蘇水(福岡)⑥
- 奥村 安直(福岡)⑥・荒木 靖邦(福岡)⑥
- 沖村 光正(福岡)⑥・安藤 光正(福岡)⑥
- 梅田 双葉(福岡)⑤・広瀬 澄子(福岡)④
- 大里 豊男(福岡)④・七熊 澄三郎(福岡)④
- 亀井准輔(福岡)③・滝 栄三郎(福岡)③
- 熊谷 雅子(福岡)②・富安 三郎(福岡)②
- 上田 満(福岡)①・小田 一郎(福岡)①

能古博物館だより

即ち、眞木泉州については、実弟の大鳥居理兵衛の責任とされ、その幽囚は実に十二年の長きに及んだ。この時、私は十一・二歳であり、泉州先生が、どうして水田に來られたかなど委細わからず、ただ水田に大人物がおいでになったという噂を聞く程度でした。

話が前後しますが、ここで私共から大鳥居理兵衛先生に就いて学問を教えられており、その話を述べておきます。

水田天満宮は、千二百五十石の社領をもち、この内、千石は徳川家からの墨付き(奉書書きの御判物という)、これに二十石が藩主有馬家、五十石は柳川の立花家から受けていた。大鳥居理兵衛家(宮司職)は、この内から二百石を受け、その他五坊という東光院(角大鳥居)、光運院(江崎)、松林院(南)、永福院(宮原)、智光院、目代奉行二人、社人四人等受けていた。

大鳥居理兵衛は二百石を受け、実に過分と思ひ、自分は高禄を受けながら何等成すことなくして天満宮に相済まぬ訳であるとして、これで子供教育をされることになる。理兵衛先生の教育は、八歳以上十二歳以下であった。始めは孝経で、私も八歳

の時に孝経を読んだ。理兵衛先生が書物を教えられる時は、初は五字か十字づつ、よく記憶するものには、一行づつ教えられた。その教授法は実に親切を極めておられた。これ水田における学問が開始されたようで、こうして数年の教育を受けたが、年々書物をよく読めるようになる。

次に四書五経に進むが、こうした先生の影響を受け、人心も自ら善良となり、後に学問する者も多くなり、理兵衛先生一人では手が行き届かなくなる。このため、先輩が順次に下級生を教えるようになった。こうして、年長が年下に、まず素讀を教える習慣が生まれた。次に歴史などの独学もできる様になり、不審が生じれば理兵衛先生に尋ねるようになった。次に、むつかしい質問は、理兵衛先生は眞木泉州先生の許に行かされたが、これは理兵衛先生の泉州先生への心づかいであることが、自分たちにもわかった。泉州先生も、よく親切に教えられた。これに加えて泉州先生は、文字の意義など、また如何なる心得で、このくだりを讀んだかなど反問され、その解し方についても尋常一般と異なるところがあつたようである。泉州先生が親切に教えられることで弟子の学問上達が早

い

- 石橋 観一(福岡)①・南 誠次郎(春日)⑤  
 木原 敬吉(飯塚)⑤・具嶋 菊乃(甘木)⑤  
 坂田 貞治(甘木)②・大久保津智夫(嘉穂)⑤  
 森野 直彦(直方)④・原田 國雄(宗像)⑦  
 永井 功(北九州)③・花田加代子(遠賀)⑥  
 本村 康雄(三池)②・中山 重夫(唐津)⑤  
 緒方 益男(佐賀)⑥・七熊太郎(佐世保)⑥  
 七熊 正(佐世保)④・浦上 健(長崎)②  
 山本 稔(広島)①・田中 貞輝(愛媛)①  
 小堀 定泰(滋賀)③・伊藤 茂(神戸)③  
 西村 俊隆(東京)⑥・白水 義晴(東京)⑥  
 早船 洋美(東京)①・翠川 文子(埼玉)③  
 石野恵子(東京)③・多々羅節子(千葉)③  
 江崎 正直(東京)⑦・熊谷 豪三(静岡)①
- 会員ご氏名には、会費ご継続七年日をおいた  
 だいたしるす。( )は多年分の日をまとめた  
 払い込み、( )は増口数ご負担を示します。
- 九州電力 株式会社 福岡支店 豊田 茂(福岡)  
 新出 光出 豊(福岡)  
 出光興産福岡支店 山本 繁弘(福岡)  
 福岡中央銀行 山本 敏一郎(福岡)  
 医療 福岡中央病院 南川 勝三(福岡)  
 日本製粉株式会社 南川 勝三(福岡)  
 福岡県警備業協会 村上 五一(福岡)  
 流通 共済 株式会社 花田 積夫(福岡)  
 タイム社印刷 組立 忠夫(福岡)  
 博多ちくわ 株式会社 松尾 嘉助(福岡)  
 権藤 理事務所 権藤 成文(福岡)  
 協通 配送 株式会社 平野 孝司(福岡)  
 大牟田運送 株式会社 山田 毅(福岡)  
 株式会社 三島設計事務所 三島 庄一(福岡)  
 日西 物流 株式会社 重則(福岡)  
 西日本急送 株式会社 重則(福岡)  
 愛宕建設工業 株式会社 野村 敏郎(福岡)  
 東洋特殊機工 株式会社 西尾 敏明(福岡)  
 南洋トラック運送 株式会社 西尾 秀明(福岡)  
 南愛光ビルサービス 野田 和禎(福岡)  
 南クリン 開発 野田 和禎(福岡)  
 延寿産業 株式会社 池田 邦夫(福岡)  
 九州三菱そうじ自販店 宮崎 慶一(福岡)  
 南河内内商店 宮崎 慶一(福岡)  
 木原 理事務所 木原 敬吉(飯塚)

※新規の御加入(先号以後、平成九年一月三十一日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。

友の会 年間3千円  
 (館の活動、館誌購読と催事企画に参加) 自然と文化の小天地創造

協賛会(個人)年間1万円  
 (法人)年間3万円  
 『館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける』

納入方法 郵便振替 01730191609970  
 財団法人 能古博物館  
 右の会費受領は、その都度本誌に掲載以後会費相当期間を名簿にします。

能古博物館の会

図書出版

『閨秀 亀井少稜伝』 詩、書、  
 で仙庄の次に多いのが同時代の亀井少稜。しかも少稜には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。

限定二、〇〇〇部  
 函録全カラ150頁・本文94頁  
 直売頒価 二、五〇〇円(送料 三八〇円)

『江河万里流る』

九大はもとより東洋諸國の  
 大学教授はじめ、中国哲学専攻又は愛好同  
 士によつてさらなる孔子学の歴史と精神が  
 集約された奇稿三十一名の論文集大成として  
 貴重文献。また、平易に親しめる儒学  
 精通書。

B5版・本文328頁  
 限定二、〇〇〇部  
 直売頒価 二、五〇〇円(送料 三八〇円)

## 能古博物館だより

くなるように感じた。

また、理兵衛先生は仲々に親切で、学問上達のために書物を買う資金に困る貧家子弟には、書物を自ら買って与えられ、又、金銭を与えて書物を買わして居られた。

欺くの如く、泉州、理兵衛両先生とも子弟に対し其の他の人々にも親切をつくされたので、郷土の者は両先生の為には一命を捨てるも決して惜しくないと思う様になった。

丁度その時節から世間は漸く騒がしくなり水戸浪士十七人が、老中の伊井掃部頭を斬るなど世の中は騒がしくなってきた。泉州先生は、その時から今は幽囚の身で終ゆべき時にあらずと思われた様で、朝廷に建白書を捧呈せんとされた。時期は明確に記憶がないが、おそらく文久年間と思います。其、建白紙は実は長文で紙数も多くあった。其の清書には、私も手伝い申しました。此の建白書は、淵上郁太郎が東上して朝廷に奉った。其後、又太宰府の小野隆助も建白書の事に就いて東上。

泉州先生が朝廷に建白書を奉ると四方の有志が水田に来ることが多くなり、最初は筑前の平野次郎であった。平野次郎は、三条公、大原公など公卿の家に出入りしており建白書

の事を早く知ったからと思われま

す。平野次郎は、身丈も高からず小男で、其の容姿も人目を引くような高い様も見えず、此人が平野次郎であるかと思われる位の人であった。泉州先生も初めの間は、此の人を疑って如何なる人物かと思われた。然るに次郎が泉州先生に歌を呈し、且つ一度面会して時勢を談じてからは泉州先生も疑いを解き、天下の大勢につき種々話を聞かれた。これで泉州先生も時勢の切迫を知られることが多く、以後は泉州先生と平野次郎との間は緊密に国事を語られ、これが泉州先生の勤王挺身の手引きであったと思われる。

この後、平野次郎を薩藩に至らしめ、薩州の情勢を聞き及ばれて泉州先生は京都も愈々と判断され、上京の決心となった。しかし、泉州先生一人上京もならず、これによって水田と久留米の同志七、八人を連れることに決まった。それから泉州先生の学問指導も一層激烈となり、水戸の会沢恒蔵(号は正志齋)の著書『新論』に就き盛んに講義せられ、朝廷の為に勤王すべしと論じられるようになった。

丁度、その時分に先帝の妹和宮様が徳川家に降嫁されることになって

天下は種々の議論がやかましく、或は之を可とし或は不可として議論が激しく、泉州先生も大いに憤慨され和宮様は皇族の身分、徳川は臣下なり。皇族の身を以て臣下に嫁さるは之れ君臣の名分は相立たぬと言われ大いに怒られ、此言は私共も親しく聞かされている。

水戸浪士の伊井掃部頭を斬ってから世は益々危急の形勢となり、平野次郎の薩州に至り時は、大久保市蔵、小松帯刀を訪い、これによって其後に大久保市蔵が羽犬塚に来ると知られると、従来の泉州先生は幽囚先の大鳥居家の外に出られることなかったが、夜分に及んで大鳥居家を出られ羽犬塚で大久保と面会された。

此の面会に従った者は淵上郁太郎一人、面会所は吉武嘉平(後に義信と改む)宅であった。

この大久保市蔵と面会され、益々天下の危急を切実にされ、泉州先生は幽囚の身でありながら、早く上京せんと思われた。

又、平野次郎は所々に奔走して幕吏の目を晦ますため、或は匿れ或は現われ、泉州先生と他の有志との間に往来していた私も平野次郎とは時々出合うことがあって話をし、又聞いたのである。

其内に薩藩主の島津久光公が愈々上京せらると、泉州先生より聞き、これは大久保市蔵より泉州先生に伝えられたものと思われま

す。すでに世の中は大騒ぎであるし、大久保の話で久光公の上京も聞いてからは、空しく月日を費やしては居られぬ心持となって自ら奮発心が起り、自分も泉州先生に従う決心がつき泉州先生の勧めをまたずして気持ち定まった。すでに薩州の橋口壮介、柴山愛次郎、肥後からは轟武兵衛、山田十郎、また出羽庄内の清河八郎、豊後の小河弥右衛門など皆命を捨て勤王攘夷の実を挙げると言う。其時、私は二十一歳であった。

(次号に続く)

## ・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月3日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX(092) 883-2881